

佐土原町文化財調査報告書

第 2 集

^ど^き^だ
土器田西横穴墓群

宮崎県宮崎郡佐土原町所在遺跡の調査

1982年

佐土原町教育委員会

佐土原町文化財調査報告書

第 2 集

と き だ
土 器 田 西 横 穴 墓 群

宮崎県宮崎郡佐土原町所在遺跡の調査

1982年

佐土原町教育委員会

序

佐土原町には、土器田横穴群をはじめとして、多数の横穴群が分布している。

開発工事等が実施される場合、町教育委員会では、事前調査を十分に行い、埋蔵文化財の現状保存に努めるとともに必要に応じ発掘調査を実施しております。

今回は、団地造成に伴う取り付け道路、坂本～平廻線改良工事の擁壁工事中、傾斜部に偶然横穴墓を発見したもので、佐土原町教育委員会では、記録・保存するため発掘調査を実施しました。幸い宮崎県教育委員会の全面的な御指導、御援助のもとで慎重かつ綿密な調査を完了することができました。

この報告書は、その事前発掘調査の記録であり、学術資料として、また社会教育、学校教育の資料として、広く活用していただくとともに、文化財保護の一助となることを念願するものであります。

最後に、この調査に御協力賜りました。宮崎県教育委員会を始め、関係者の方々に心から感謝し厚くお礼申し上げます。

昭和 58 年 3 月 31 日

佐土原町教育委員会 教育長 緒 方 春 夫

例 言

1. 本書は、佐土原町宅地造成に伴い取り付け道路坂本平廻線改良工事に伴い、佐土原町教育委員会が実施した土器田（どきだ）横穴墓群の発掘調査報告書である。
2. 本書を佐土原町文化財調査報告書第2集とし、昭和56年3月に佐土原町教育委員会より出された「一般国道10号佐土原バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(土器田横穴占墳)」を文化財調査報告書第1集として扱った。
3. 発掘調査は、昭和57年2月5日から昭和57年2月13日まで実施した。
4. 調査関係者は次の通りである。

調査主体 佐土原町教育委員会

調査責任者 佐土原町教育委員会

教育長 後 藤 典 夫 (昭和56年度)

教育長 緒 方 春 夫 (昭和57年度)

事務局 佐土原町教育委員会

社会教育課長 田 代 勉

同 課長補佐 関 屋 卓 三 (昭和56年度)

同 課長補佐 中 井 徳 雄 (昭和57年度)

調査員 永 友 良 典 (県教育庁文化課主事)

長 津 宗 重 (県総合博物館主事)
(現県教育庁文化課主事)

5. 本報告書の執筆編集等作成に関するすべては、永友と長津が行った。
6. 本部報告書中の横穴墓の名称については、51年度・55年度の調査報告を考慮し、51年度調査の横穴墓を土器田西1号、2号、3号横穴墓とし、今回調査の横穴墓を土器田西4号横穴墓、土器田西5号横穴墓とした。

本文目次

第 1 章 遺跡の立地と環境	2
第 2 章 調査に至る経過	5
第 3 章 遺 構	6
1. 土器田西 4 号横穴墓	6
2. 土器田西 5 号横穴墓	8
第 4 章 遺 物	10
1. 土器田西 4 号横穴墓	10
(1) 土 師 器	10
(2) 須 恵 器	10
(3) 玉 類	16
(4) 耳 環	16
(5) 鉄 器	17
2. 土器田西 5 号横穴墓	19
第 5 章 結 語	19

挿 図 目 次

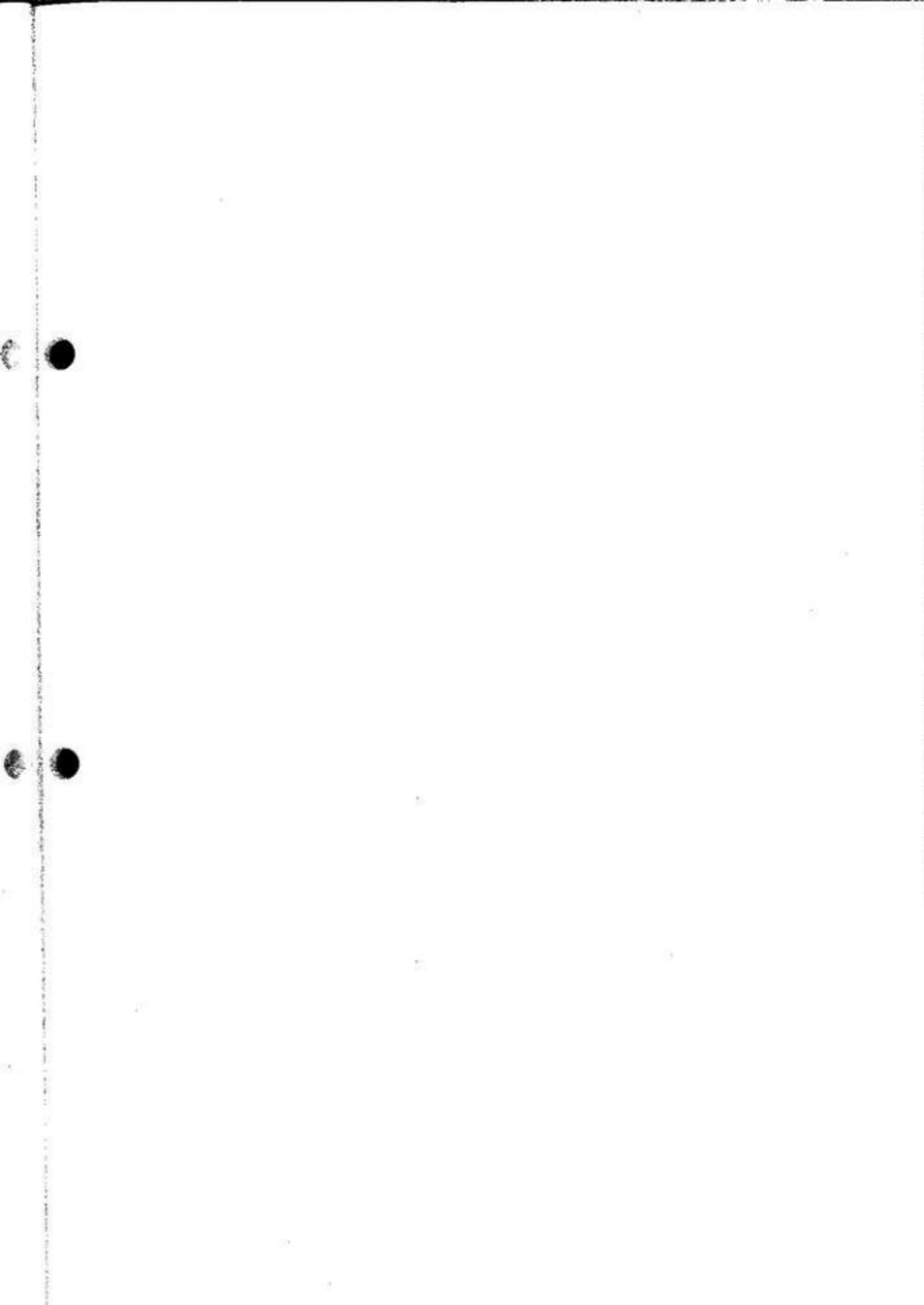
第 1 図 遺跡の所在地	1
第 2 図 横穴墓の分布図	4
第 3 図 土器田西 4 号横穴墓実測図	7
第 4 図 土器田西 5 号横穴墓実測図	8
第 5 図 土器田西 4 号横穴墓出土遺物出土状況図	9
第 6 図 土器田西 4 号横穴墓出土土器実測図(1)	12
第 7 図 土器田西 4 号横穴墓出土土器実測図(2)	13
第 8 図 土器田西 4 号穴墓、西 5 号横穴墓出土土器実測図	14
第 9 図 土器田西 4 号横穴墓出土遺物実測図(1)	17
第 10 図 土器田西 4 号横穴墓出土遺物実測図(2)	18

図 版 目 次

図版 1	遺跡遠景 (南側)	23
	遺跡遠景 (東側)	23
図版 2	土器田西 4 号横穴墓 (玄室内右)	24
	土器田西 4 号横穴墓 (玄室内左)	24
図版 3	土器田西 4 号横穴墓 (羨道部)	25
	土器田西 4 号横穴墓 (奥壁)	25
図版 4	土器田西 5 号横穴墓	26
図版 5	土器田西 4 号横穴墓出土遺物(1)	27
図版 6	土器田西 4 号横穴墓出土遺物(2)	28
図版 7	土器田西 4 号横穴墓出土遺物(3) 西 5 号横穴墓出土遺物	29
図版 8	土器田西 4 号横穴墓出土遺物(4)	30

表 目 次

第 1 表	佐土原町内既調査横穴墓一覧表	2
第 2 表	土器田西 4 号横穴墓出土土器計測表	15
第 3 表	土器田西 4 号横穴墓出土玉類計測表	16





第1図 遺跡の所在地

1. 土器田横穴群 (A. 東1号、2号横穴墓、B. 土器田1号、2号、3号横穴墓、C. 土器田西4号、5号横穴墓)
2. 岩穴ヶ追横穴墓群 3. 城ヶ峰横穴墓群 4. 年居横穴墓群

第1章 調査の立地と環境

今回調査した2基の横穴墓は、宮崎市の北部に隣接する宮崎県佐土原町南部にひろがる丘陵の南端小突出部に所在する。この丘陵部は北に一ツ瀬川が流れ、その右岸に形成するもので、南には沖積平野が大きくひろがり、石崎川が蛇行しながら東へ流れる。この一帯は県指定古墳の広瀬村古墳群がひろがり、丘陵下の沖積平野の宮崎県総合農業試験場東側には円墳⁽¹⁾がある。今回調査の横穴墓もこの古墳群の一角をなす土器田横穴群の中にあり、この横穴群には40基を越す横穴が県指定されており、昭和55年11月に調査した壁面を持つ土器田東1号横穴⁽²⁾をはじめ未指定の横穴墓も多く、今回調査の横穴墓もその一つである。周辺部の丘陵にも横穴墓が数多く分布しており、土器田横穴群を形成する丘陵の北辺部には岩穴ヶ迫横穴群南には、総合農業試験場西の丘陵に城ヶ峰横穴群、石崎川をはさんで西にひろがる丘陵には年居横穴群が分布する。また、土器田横穴群の北西5kmには上田鳥横穴群が分布する。さらには隣接する宮崎市北部にも、国指定史跡の速ヶ池横穴群をはじめ、広原横穴群、池内横穴群など多くの横穴墓が分布する。

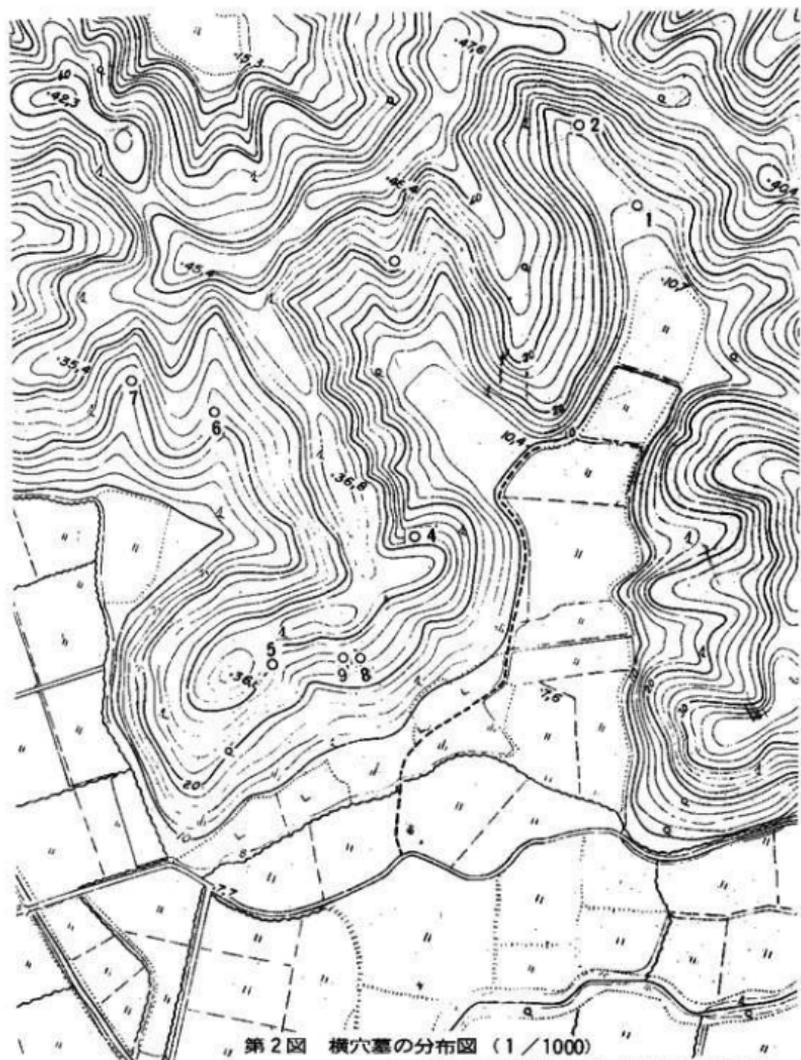
なお、佐土原町内の横穴墓の調査例としては、第1表のとおり昭和43年の県総合農試裏横穴墓⁽³⁾、昭和44年の袋住宅団地横穴古墳⁽³⁾があるが、土器田横穴群でも昭和51年、55年に5基の横穴墓の調査が行われ、特に、55年12月に佐土原町教育委員会の調査した土器田東1号横穴は、今回調査の横穴とは小谷をはさんだ東側の突出部にあり、玄室内に、鳥、人、魚と連続三角文を描いた線刻壁面をもち注目されており、佐土原町を中心にして、この線刻壁面をもつ土器田東1号横穴の保存が検討されている。

近年、佐土原町は宮崎市のベッドタウンとして宅地化が急速に進んでおり、これに伴い土器田横穴群をはじめとする横穴が多く分布する丘陵の造成が各地で行われており、いくつかの横穴が破壊され、また、崩壊の危機にさらされている。そんな中、佐土原町、県、建設省の努力で、土器田東1号横穴が保存されようとしていることは、大変意義深いことである。
(永友良典)

第1表 佐土原町内既調査横穴墓一覧表

番号	名称	所在地	出土品	調査年月日
1	県総合農試炭横穴 1号横穴	佐土原町大字下那珂 字城ヶ峠	須恵器環(2)、土師小埴(1)、刀子、 鉄鍬残欠(1)、貝片(1)	昭和43年10月16日 ～ 10月17日
2	同 2号横穴	同		
3	同 3号横穴	同	金環(1)、刀(1)、刀子(1)、鉄鍬(10数 本)残(1)、鈴(1)、蓋(2)、土師器(埴 1)、深鉢(1)、甗(1)須恵器(埴瓶(2) 瓶(1)、高坏(1)、蓋坏(4)、片0個	
4	炭住宅団地横穴	佐土原町大字下田島 20,305		昭和44年8月4日
5	土器田横穴群 第1号横穴墓	佐土原町大字下那珂 字土器田12,783-16	須恵器蓋(4)、坏(2)、埴(5)	昭和51年3月15日
6	同 第2号横穴墓	同	須恵器蓋(5)、坏(2)、埴(5)、土師器、 椀(1)、壺(1)、刀子(1)	～ 3月25日
7	同 第2号横穴墓	佐土原町大字下那珂 字土器田12,797-2	須恵器蓋0個、坏(7)、椀(9)、平皿(2)、 瓶(1)、舞付盤(1)、土師器高坏(1)、刀 子(1)、輪金具(2)、鉄釘、金環(1)	
8	同 東1号横穴	佐土原町大字下那珂 字土器田12,734-6	須恵器蓋0個、坏0個、埴(1)、壺(1)、土 師器坏(3)、高台(1)、平瓶(1)、鉄鍬(3) 刀子(2)、大刀(1)、馬具(2)(2)	昭和55年11月17日
4	同 東2号横穴	同	土師器片、鉄鍬(6)、刀子(4)	～ 12月5日

- 1) 曾我部長良「日向の横穴」1975年10月
- 2) 佐土原町教育委員会「一般国道10号佐土原バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書
(土器田横穴古墳)」1981年
- 3) 宮崎県教育委員会「宮崎県文化財調査報告書第16集」1972年3月
- 4) 宮崎県教育委員会「宮崎県文化財調査報告書第23集」1981年3月



第2図 横穴墓の分布図 (1/1000)

- | | | |
|-------------|--------------|--------------|
| 1. 土器田1号横穴墓 | 4. 県指定39号横穴墓 | 7. 県指定23号横穴墓 |
| 2. 土器田2号横穴墓 | } (51年度調査分) | 8. 土器田西4号横穴墓 |
| 3. 土器田3号横穴墓 | | 9. 土器田西5号横穴墓 |
| | 5. 県指定25号横穴墓 | 6. 県指定24号横穴墓 |

第2章 調査に至る経過

佐土原町教育委員会では、七器田横穴群の立地する台地に、財団法人佐土原町開発公社が宅地造成を行い、それに伴って光陽台から県道下那珂一広瀬線に通ずる町道坂本一平廻線改良工事に着手し切り取り工事施工中傾斜部に横穴基を偶然発見した。そのため、その区間の工事を一時中断させ現地確認調査を県教育庁文化課主事小森達郎氏に依頼し、昭和56年12月14日横穴墓であることが確認された。

横穴墓の取り扱については、慎重な協議を重ねたが既に急傾斜地に掘削され現状保存が困難でありかつ危険な状態にあるなどの判断から、佐土原町教育委員会が調査主体となり緊急発掘調査を実施することになった。発掘調査は、緊急を要することで調査員を県教育委員会に依頼、県文化課主事永友良典・県総合博物館主事長津宗重の両氏を派遣していただき、その援助を受け発掘調査を実施した。(永友良典)

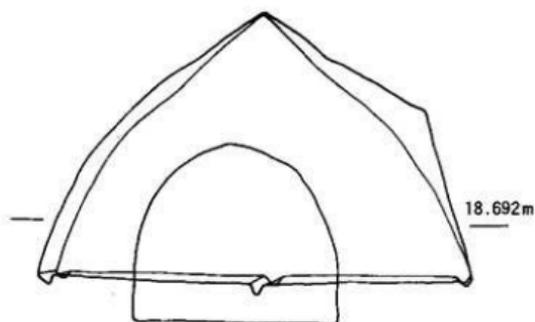
第3章 遺 構 (第3図～第4図)

1. 土器田西4号横穴墓 (第3図)

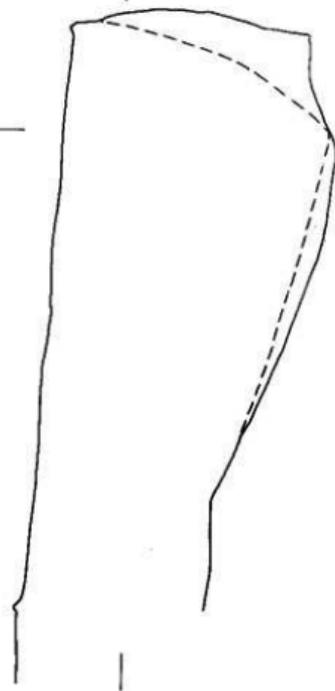
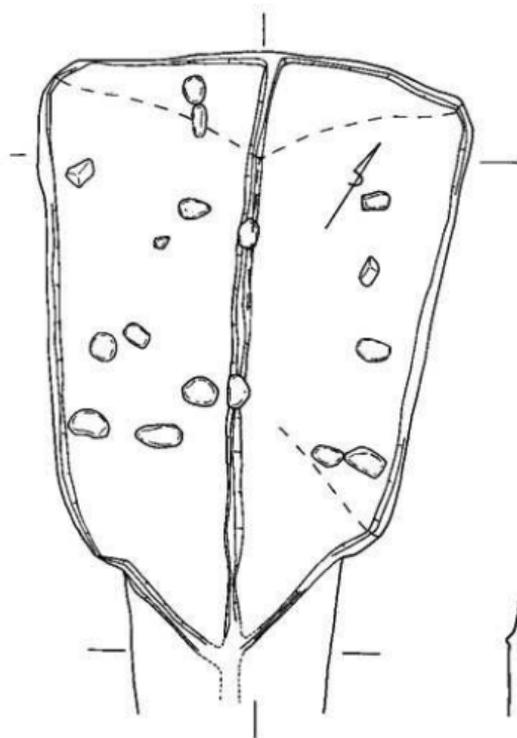
4号横穴墓は、調査前の状況では、羨道部がわずかに開いており、玄室内には天井部の剥落と思われる土塊や流入土がみられたが、さほど多量ではない。横穴はシルト岩層に掘り込んで作られており、玄門部から120cm羨道部方向へ行った所で崩されており、前羨道部、前庭部は確認できなかった。主軸はN-28°-Eを示す。玄室は奥壁幅348cm、玄門部から奥壁までの全長405cm、左壁長375cm、右壁長347cm、玄門部で幅177cmを測り、両側にゆるやかな袖部をもつ。逆台形状の横穴である。天井部は、妻入り型寄棟造りに近い形態で、高さの最高部は、奥壁から85cmの所で217cmを測り、玄門部では143cmを測る。床面は、奥壁側が最も高く、羨道部にかけてゆるやかに傾斜して行く。玄室内には、奥壁から左右壁に添って巾10cm、深さ5~10cmの溝が廻り、また、玄室内中央に奥壁から羨道部に向って巾10~15cm、深さ5~10cmの溝が1本通り、玄門部から80cm羨道部に入った中央部で、3本の溝が1本に交じる形態をとる。天井部、壁面とも、巾10~20cmのたて方向の調整痕が良好に残存する。

床面には、30~40cm大の丸石が置かれており、遺物には、土師器の高坏、琿、須恵器の坏蓋、平瓶、罎、脚付長頸壺、直刀、鉄鏃、鉋具、馬具、耳環、小玉がある。

そのうち、玄室内左壁際からは完形の須恵器坏身、蓋6個体、右壁際から4個体出土し、その南側から、直刀1本が出土し、脇の溝中からは3本が置かれた状態で出土している。また左袖部には、ほぼ完形の土師器高坏と鉋具、馬具、右袖部には完形の須恵器坏がみられ、玄門部中央部からは完形の須恵器坏身と馬具が出土している。羨道部からも、右角に脚付長頸壺、琿がほぼ完形で出土し、左角には鉄鏃等の鉄片が多くみられる。さらに、3本の溝が交わる部分には、土師器高坏が壊された状態で出土している。また、この周辺の溝からは金環や玉類も出土している。耳環はその他に玄室内右壁溝の直刀下からもみられる。玉類も玄室部中央の溝中やその右側から集中して出土する。(永友良典)



18.692m



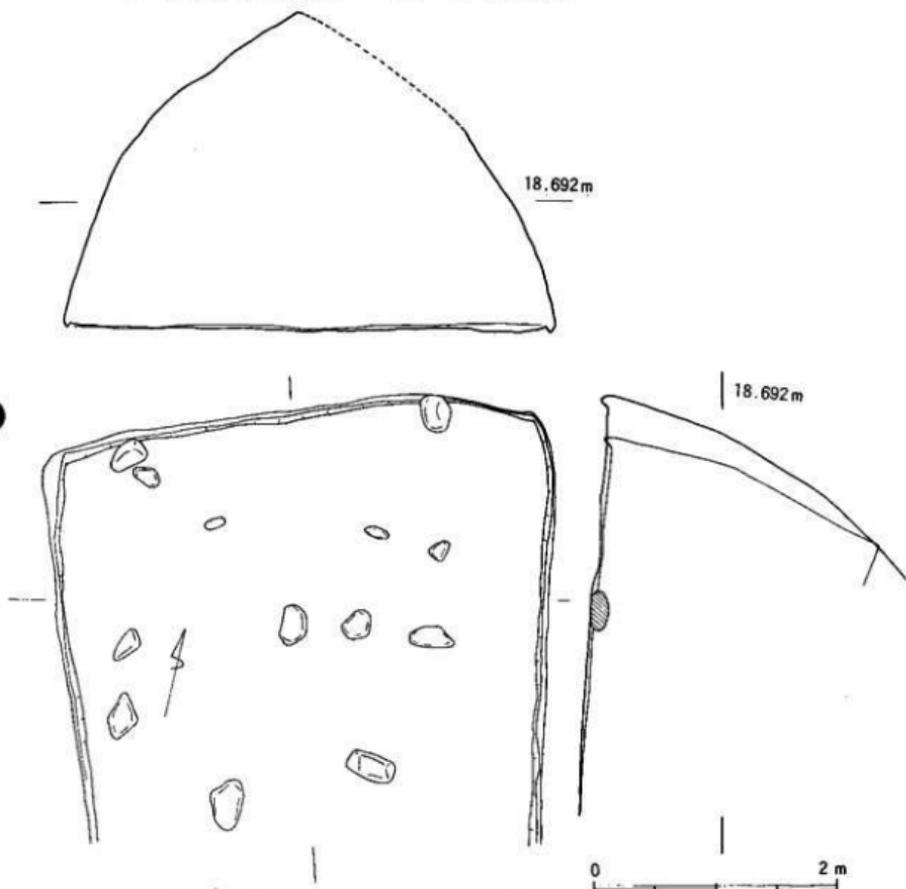
第3圖 土器田西4号横穴墓実測図

0 2m

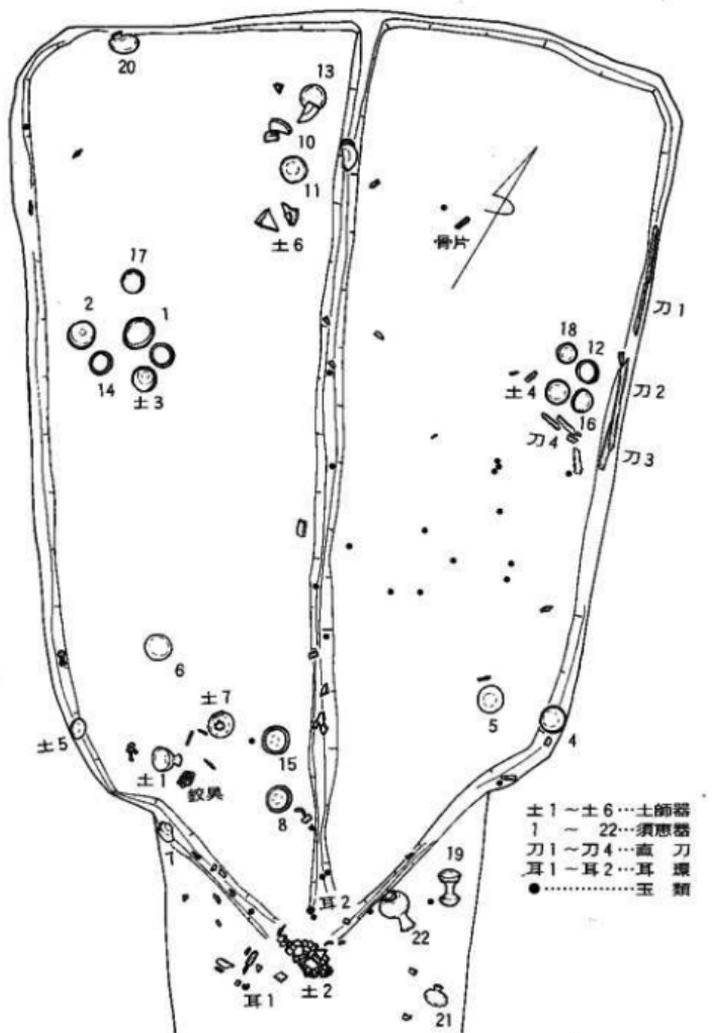
2. 土器田西5号横穴墓（第4図）

2号横穴墓は、4号横穴墓の西3mの所にあり、発見時にはすでに玄室部が床面では半分以上、天井部においては奥壁を残す程度に崩されていた。1号横穴同様、シルト岩層に掘り込んである。玄室部は奥壁幅402cm、高さ265cmを測り、1号横穴墓よりひと回り大型の横穴墓である。床面は、奥壁際が高く羨道部方向へゆるやかに傾斜している。壁際には幅10cm、深さ3～5cmの溝が廻る。床面には、20～40cm大の丸石が13個みられる。

遺物は、須恵器坏身、蓋、土師器片、鉄片等がみられ、玄室の奥壁角と前方部に骨片がわみられる程度である。主軸はN-15.5°-E（永友良典）



第4図 土器田西5号横穴墓実測図



第5图 土器田西4号横穴墓遺物出土状況图 (1/3) 0 1m

第4章 遺物

1. 土器田西4号横穴墓(第5図～第11図)

(1) 土師器(第6図1～6)

1～3は高環で、1、2はほぼ完形品で、3は坏部のみで脚部を欠くが、3つとも埴状の坏部に、外反しながら大きくひろがる短かい脚部をもつ、口縁部は、口唇部にやや丸味もち口縁部直下がわずかに内に凹みながら外反する。脚部も裾部端がわずかに外反するようにつまみあげてある。焼成も良好で調整もきれいなへら削りが施されている。1は高さ8.6cm、口縁径13.4cm、2は高さ8.9cm口縁径13.6cm、3は坏部のみで口縁径12.4cmで他の2つより坏部に丸味をもつ。他にもほぼ完形の坏部(第5図一土7)や坏部と脚部と接合部の破片があり、合わせて5個体の高環があったと思われる。高環は全て同時期と思われる。

4～6は埴で、4は高さ4.4cm、口縁径12.9cmを測り、他に比べると厚手である。5は高さ5.0cm、口縁径9.8cm、6は高さ5.7cm、口縁径15.3cmで薄手である。調整は、口縁端部に指によるなど調整がみられ、特に4は鋭く調整している。また、口縁部には内外面ともバケ目調整が施されているが、5は摩滅しており調整痕は確認できない。胎土、焼成とも高環に比べると雑である。6は、中位までハケ目がみられ、内面には3mm巾のハケ目痕が鋭くつく。

(2) 須恵器

環蓋

B類(第7図2・4)

口径13.7cm～14.4cm、器高4.3cm～4.6cmで、天井部と体部の境が凹彎するものとしなもの2種がある。口縁部は直立気味に下方に伸び、端部は丸い。天井部はへら削りを施す。

C類(第7図6)

口径13.0cm、器高4.0cmで、口縁部はほぼ直立気味に、途中で若干外反する。口縁端部は丸い。天井部はへら切りそのまま未調整。

D類(第7図7～13)

口径10.8cm～11.4cm、受部径12.2cm～14.1cm、立ち上がり高0.2cm～0.4cm、器高3.3cm～4.1cmで、立ち上がりは内傾して短く伸び、端部は鋭い。受部は斜目下方に伸び、端部は丸い。天井部にへら削りを施したD1類、へら切り後未調整のD2類、口径の一回り小さいD3類、生焼けのD4類がある。

E類(第7図14)

天井部に乳頭伏の宝珠揃みを有し、身受けかえりを持つ。口径10.4cm、受部径12.0cm、立

ち上がり高 0.2cm。

環身

A 類 (第7図1)

口径15.4cm, 受部径17.6cm, 器高 4.5cm, 立ち上がり高 1.1cmで, 立ち上がりがやや内傾し, 途中からはほぼ直立気味になり, 端部は丸い。

B 類 (第7図3・5)

口径11.4cm~12.3cm, 受部径13.9cm~14.6cm, 器高 3.8cm~ 4.1cmで立ち上がり高が 0.9cm~ 1.0cmと短く内傾する。端部に丸味をもつB1類と若干平坦気味のB2類がある。

C 類 (第7図15)

口径11.7cm, 受部径13.8cm, 器高 3.7cmで, 立ち上がり高が 0.6cmと短く, 立ち上がりがやや内傾し, 途中からはほぼ直立気味になり, 端部は若干平坦気味である。受部と立ち上がりの間に甘い溝をもち, 受け部上面は凹状を呈する。

D 類 (第7図16, 第8図17・18)

口径11.8cm~12.8cm, 器高 3.4cm~ 4.1cmで, 口縁部はほぼ直立気味で, 端部は若干丸味を呈し, 底部はへら切り後末調整である。この段階で杯の身と蓋が逆転する。

罍 (第8図19)

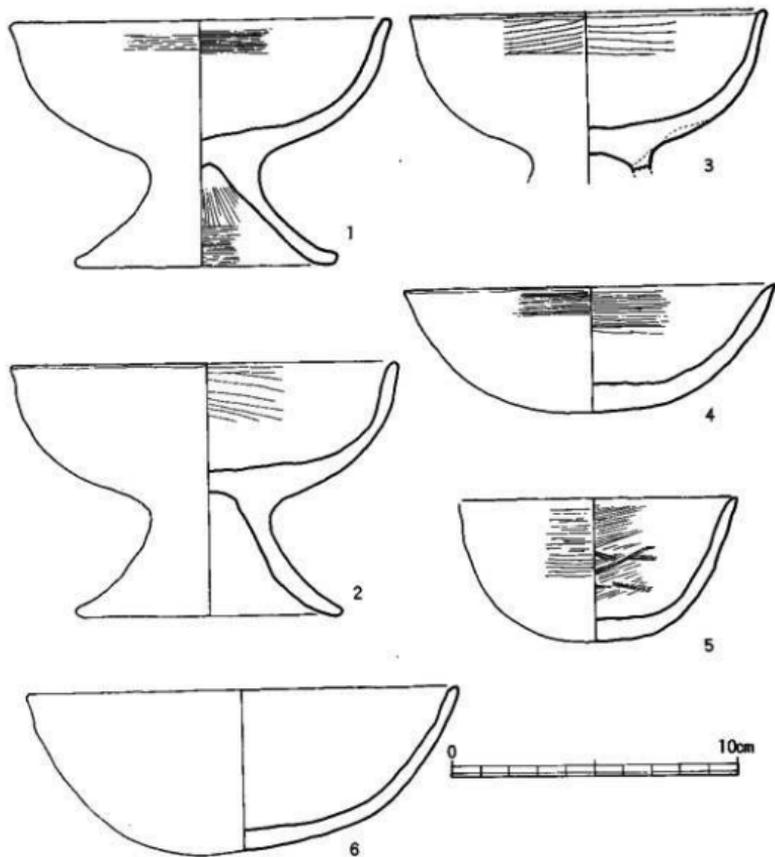
口径12.3cm, 胴部最大径 9.5cm, 器高15.1cmを測り, 口頸部の発達が著しく, 口縁端部は丸い。口頸部の境及び球形部の沈線がない。球形部の下半部はへら削り, 他は横ナデを施す。底部に×印のへら記号がある。

平瓶 (第8図20・21)

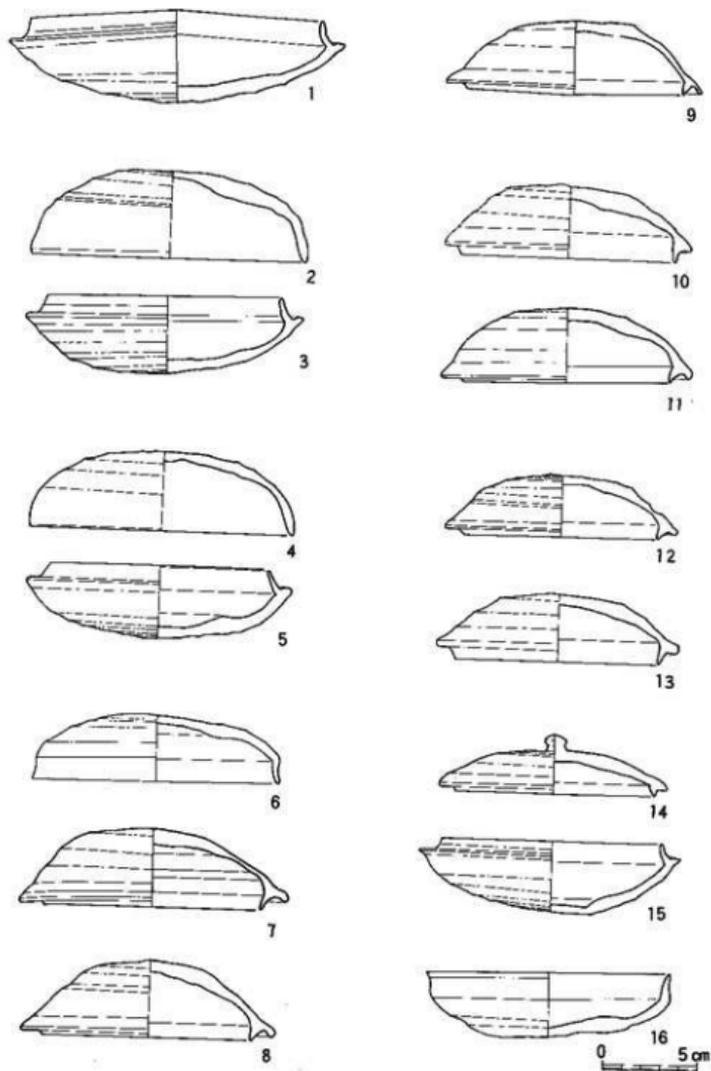
大形の平瓶は, 口径 6.7cm, 胴部最大径17.4cm, 器高15.0cmを測り, 頸部は短く外傾し口縁端部は丸い。体部上半はナデ, 下半はへら削りを施す。頸部に|印のへら記号がある。小形の平瓶は, 口径 5.5cm, 胴部最大径11.3cm, 器高 9.4cmを測り, 口頸部に沈線を施し, 口縁端部は丸い。体部上半はナデとカキ目, 下半はへら削りとカキ目を施す。

脚付長頸壺 (第8図22)

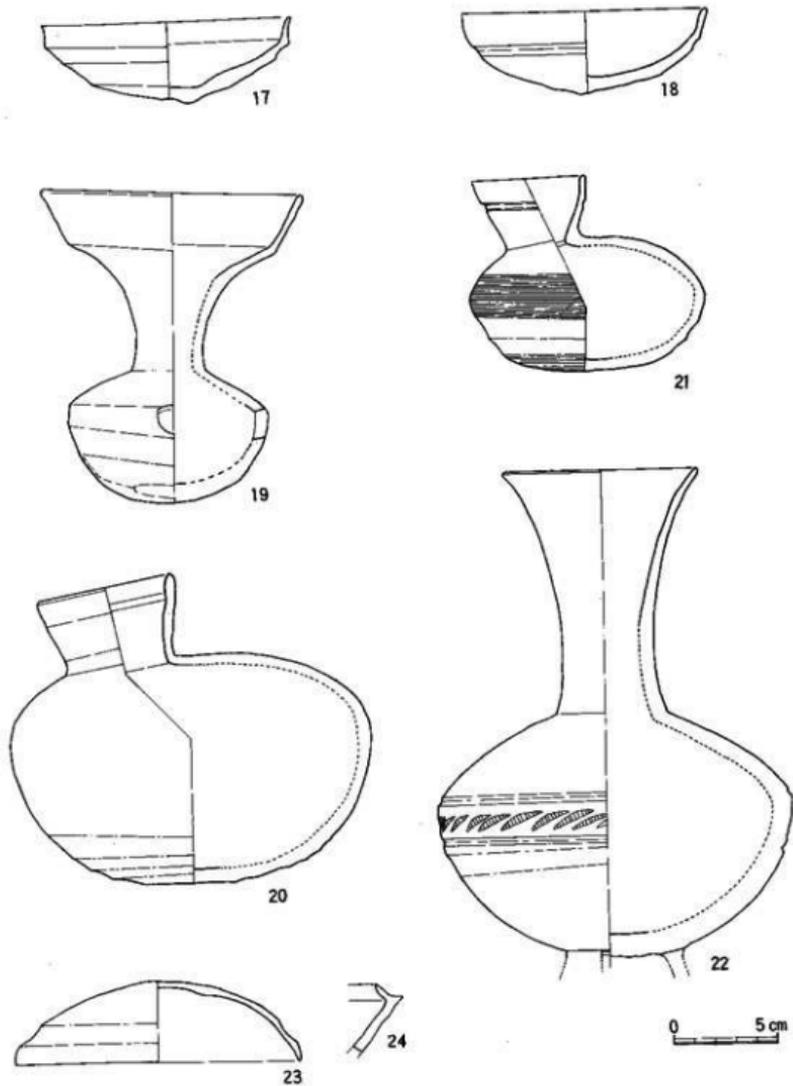
口径 9.4cm, 胴部最大径17.1cm, 現存器高25.5cm, 口頸部がほぼ直立しながら伸び, 途中から外反し, 口縁端部は丸い。体部の2本の沈線の間に櫛形列点文を施す。体部上半は横ナデ, 下半はへら削りと横ナデを施す。脚部に長方形透しがあるが, 脚部のはほとんどは欠如。体部上半に|印のへら記号がある。(長津宗重)



第6図 土器田西4号横穴墓出土土器実測図(1) (1/2)



第7図 土器田西4号横穴墓出土土器(2)(1/3)



第8図 土器田西4号横穴墓(17~22) 西5号横穴墓(23)

出土土器実測図 (1/3)

表2 4号横穴墓出土須恵器計測表(単位cm)

器形	類	No.	口径	器高	受部径	立ち上り高	胎土	焼成	色調	ロクロ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点	時期	備考
環	B	2	14.4	4.6			砂粒多	良好	灰白色	時計		玄室左	ⅢB	No.3と セット
	B	4	13.7	4.3			砂粒多	良好	灰青色	時計		玄室右	ⅢB	No.5と セット
	C	6	13.0	4.0			砂粒多	良好	灰青色	時計		玄室左	ⅣA	
	D ₁	7	11.4	4.2	14.1	0.3~0.45	砂粒多	良好	灰白色			羨道	ⅣB	自然胎
	D ₂	8	10.9	4.1	13.4	0.2	精選	良好	灰白色	時計		玄室左	ⅣB	
	D ₁	9	11.3	3.9	13.4	0.2~0.3	砂粒 ^{若干多し}	良好	灰白色			玄室左	ⅣB	自然胎
	D ₂	10	11.2	3.9	13.0	0.4~0.6	砂粒多	良好	灰青色			玄室左	ⅣB	
	D ₁	11	10.8	3.9	13.2	0.2	精選	良好	灰青色	時計		玄室左	ⅣB	自然胎
蓋	D _a	12	10.4	3.3	12.2	0.3	砂粒多	良好	灰青色	時計		玄室右	ⅣB	内面朱
	D _a	13	10.7	3.6	12.8	0.6	砂粒多	不良	灰白色	逆時計		玄室左	ⅣB	生焼け
	E	14	10.4	3.1	12.0	0.2	砂粒多	良好	灰青色	時計		玄室左	V	曇み
	類	No.	口径	器高	受部径	立ち上り高	胎土	焼成	色調	ロクロ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点	時期	備考
環	A	1	15.4	4.5	17.6	1.1	砂粒少	良好	灰白色	時計		玄室左	ⅢA	
	B	3	12.3	4.1	14.6	0.9	砂粒多	良好	灰白色	時計		中央溝	ⅢB	No.2と セット
	B	5	11.4	3.8	13.9	1.0	砂粒多	良好	灰青色	時計		玄室左	ⅢB	No.4と セット
	C	15	11.7	3.7	13.8	0.6	砂粒多	良好	灰白色	時計		玄室左	ⅣA	
	D	16	12.8	3.4			砂粒少	普通	灰白色			玄室右	ⅣB	
	D	17	12.0	4.0			砂粒少	普通	灰白色			玄室左	ⅣB	
	D	18	11.8	4.1			砂粒多	不良	灰青色		×	玄室右	ⅣB	
器形	類	No.	口径	器高	体部最大径	胎土	焼成	色調	ロクロ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点	時期	備考	
瓦	線	19	12.3	9.5	15.1		砂粒多	良好	灰青色	逆時計	×	羨道	ⅣB	
平		20	6.7	17.4	15.0		砂粒少	普通	灰白色	時計		玄室左	ⅢB	
瓶		21	5.5	11.3	9.4		砂粒少	普通	灰青色	逆時計		羨道	ⅢB	カキ目
脚付 灰瓶		22	9.4	17.1	25.5+α							羨道	ⅢB~ⅣA	

5号横穴墓出土須恵器計測表(単位cm)

器形	類	No.	口径	器高	受部径	立ち上り高	胎土	焼成	色調	ロクロ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点	時期	備考
環	蓋	23	13.8	4.0			砂粒少	軟	灰黒色			玄室	ⅣA	No.24と セット
環	身	24					砂粒少	軟	灰黒色			玄室	ⅣA	

(3) 玉類 (第10図1~21)

玉類には2種類あり1~21は、長さ4mm~10mm、径9mm~6mm、孔径3mmのコバルトブルー系の色のガラス製の小玉で、1~9は玄室右側の中央部より、10~15は中央溝の中より、16~21は羨道部の中央部の溝が交差しあう溝中や周辺部より出土している。また、その他にも、溝中の直刀や鍬具にも粘土とともに付着していた。もう一つの玉は、長さ2mm~1.5mm、径3mm、孔径0.5mmのライトグリーン系のガラス製の小玉を6点ほど出土している。玉類の詳細については下表第3表のとおりである。(永友良典)

第3表 土器田西4号横穴墓出土小玉計測表

番号	長さ mm	径 mm	孔径 mm	番号	長さ mm	径 mm	孔径 mm
1	8.45×7.7	5.6×4.9	1.55×1.65	11	8.6×8.0	5.95×6.0	1.75×2.0
2	7.8×6.9	4.55×5.75	2.4×1.9	12	9.2×9.0	8.0×7.45	1.9×1.75
3	7.9×7.8	6.65×5.9	2.45×2.3	13	7.1×6.1	7.35×6.85	1.5×1.65
4	8.8×8.9	6.65×6.1	2.05×1.85	14	7.1×7.3	4.6×5.2	1.85×1.85
5	8.6×7.7	4.8×4.2	1.7×1.75	15	8.35×8.4	6.9×6.5	3.15×2.75
6	6.95×8.3	6.35×5.7	1.65×1.65	16	7.15×8.15	4.9×4.7	1.85×1.7
7	8.3×7.35	4.55×4.3	1.7×1.8	17	7.3×7.35	4.65×4.3	1.5×1.65
8	8.7×8.75	9.90×8.85	2.3×2.3	18	8.15×8.0	4.3×4.15	2.0×1.95
9	7.7×7.85	6.45×6.0	1.85×1.80	19	6.7×8.15	5.2×4.6	1.8×1.7
10	8.8×7.95	4.3×3.7	2.2×2.15	20	7.4×6.8	3.4×4.2	2.45×1.7
				21	8.3×9.0	6.95×4.45	1.55×1.5

(4) 耳環 (第10図22~25)

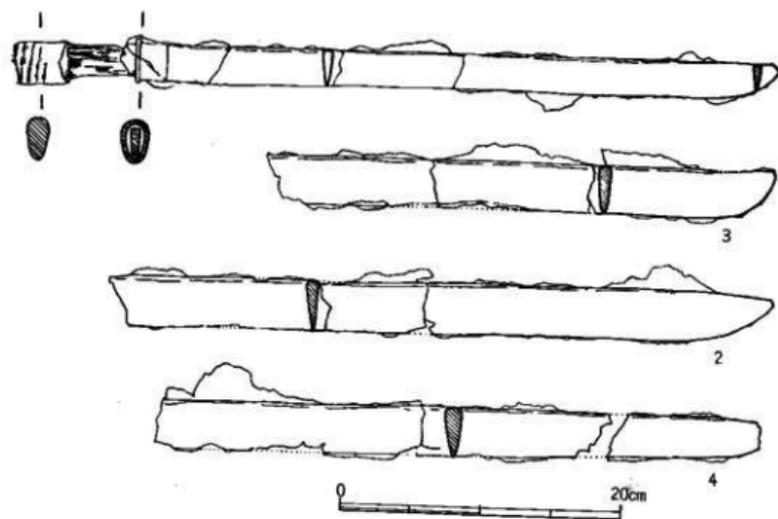
22~25は胎に金箔を置いたもので、22以外は金箔の残存状態は良好である。22は羨道部中央よりやや左寄りの所から出土したもので、長径3.0cm、短径2.8cm、断面径0.6cmを測る。23は同じ羨道部中央の溝の交差する溝中より出土したもので、長径2.8cm、短径2.6cm、断面径0.6~0.7mmである。24と25は玄室内右壁際の溝より出土した直刀の真下より検出されたもので、24は、長径3cm、短径2.7cm、断面径0.7cm、25は長径3.8cm、短径3.4cm、断面径0.9cmで4個体中最も大きな耳環である。(永友良典)

(5) 鉄器 (第9図~第10図)

1. 直刀 (第9図1~4)

直刀は全部で4振分が玄室内壁溝とその周辺から出土している。

1は、ほぼ完形を保っている。現存全長54.7cm、刀長の長さ45.1cm、身幅は関寄りで2.5cm、鋒寄りで2.4cm、背幅0.8cmを測り細身を呈する。柄部も残存しており本質がみられ、木皮らしきものを巻いた痕跡がみられる。幅3cm、厚さ1.5cmの継面印形をしている。鞘口には長さ9.5cm巾2.8cm、厚さ1.9cmの断面印形を呈する銀装が施されている。2、3は1よりも奥壁方向に2振重ねた状態で置かれていた。2は、現存全長47.0cm、背幅0.9cm、身幅は鋒寄りで3.7cmを測る。3は2の下から出土し、現存全長36.0cm、背幅0.9cm、身幅は鋒寄りで3.5cmである。この2振とも関寄りの部分を欠く。4は、それらの左側に溝から浮いた形で4本に折れた状態で出土した。現存全長41.0cm、背幅1.0cm、身幅は鋒寄りで3.0cmを測る。4も、関寄りが完全に欠損しているが、鋒寄りの部分にも欠損がみられる。



第9図 土器田西4号横穴墓出土遺物実測図(1) (1/4)

2. 鉄 鏃 (第10図26~32)

26~32は全て方頭広根芹箭式の鉄鏃で、中央部溝やその周辺部や換道部、それに、奥壁左角等から出土している。

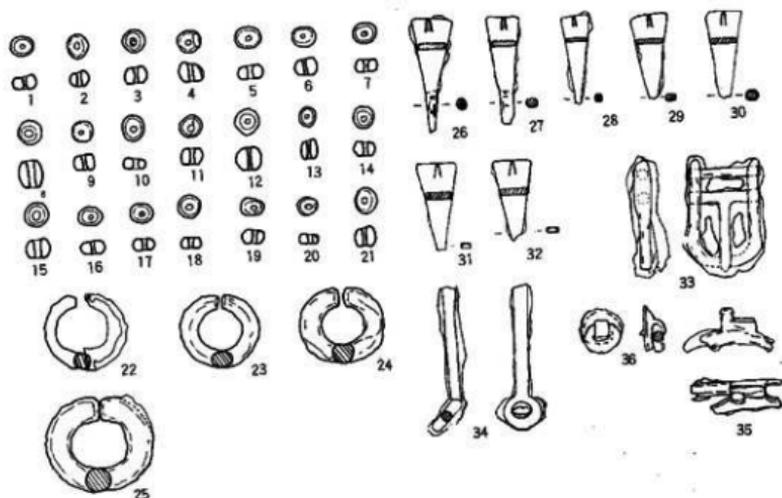
26は、現存全長7.9cm、鏃身最大幅2.7cm、厚さ0.4cm。27は、現存全長7.3cm、鏃身最大幅2.3cm、厚さ0.3cmで、26、27とも柄部に木質が残る。28は、現存全長5.0cm、鏃身最大幅1.9cm、厚さ0.3cm、29は、現存全長5.8cm、鏃身最大幅2.5cm、厚さ0.3cmで、28、29とも先端部に傾がみられる。30は現存全長5.9cm、鏃身最大幅2.4cm、厚さ0.4cmを測る。31は現存全長4.9cm、鏃身最大幅1.5cm、厚さ0.4cm、32は、現存全長4.4cm、鏃身最大幅1.5cm、厚さ0.4cmをそれぞれ測る。

3. 馬 具 (第10図33~36)

33は、鉄製鞍具で玄室内左袖部付近より出土した。全長7.5cm、幅4.6cm~4.9cm、刺金は4.5cmを測る。中央部が弱冠湾曲し、断面は長方形または四角形を呈する。34は、轡の引手の部分で9.9cmの長さを測り、環部は約135°の角度を持ち、径2.7cm、孔径1.3cmを測る。

35は、鐙の一部、36は、飾金具で、その他にも鞍具の刺金や鐙の破片等がみられた。

(永友良典)



第10図 土器田西4号横穴墓出土遺物実測図(2)(1/2) 0 5cm

2. 土器田西5号横穴墓(第8図23・24)

(1) 須恵器

坏蓋(第8図23)

復元口径13.8cm, 器高4.0cm, 天井部は丸く, 犬井部と口縁部の境は強い横ナデで凹状になっており, 口縁部は若干直立気味に斜目下方に伸びる。生焼けの土器である。

坏身(第8図24)

受部上面は平坦で, 立ち上がりが内傾して短く伸び, 端部は鋭い。(長津宗重)

第5章 結 語

土器田西4号横穴墓は, 玄室が逆台形プランで家形を呈しており, 袖部は非常に甘い構造である。玄室の中央と四角に溝をめぐるし, 羨道部で集結している。当横穴墓出土の須恵器は, 須恵器形態の細部に差異がみられるが, A類は小田富上雄氏編年のⅢA, B類はⅢB, C類はⅣA, D類はⅣB, E類はⅤに相当し, 6世紀中頃～7世紀前半に比定される。麻はⅢB, 平瓶はⅢB, 脚付長頸壺はⅢB～ⅣAに相当する。また土師器の高Ⅱは形態から須恵器のⅣに併行する。また追葬が行われたのは出土須恵器の変遷から明らかである。4号横穴墓は6世紀中頃に造営され, 7世紀前半まで追葬が行われた。5号横穴墓からは須恵器のⅣAの坏が出土しているが, これは6世紀末の追葬の段階と考えられ, 構造は4号横穴墓と同じであるので, ⅢAの6世紀中頃にはすでに造営されていたと思われる。

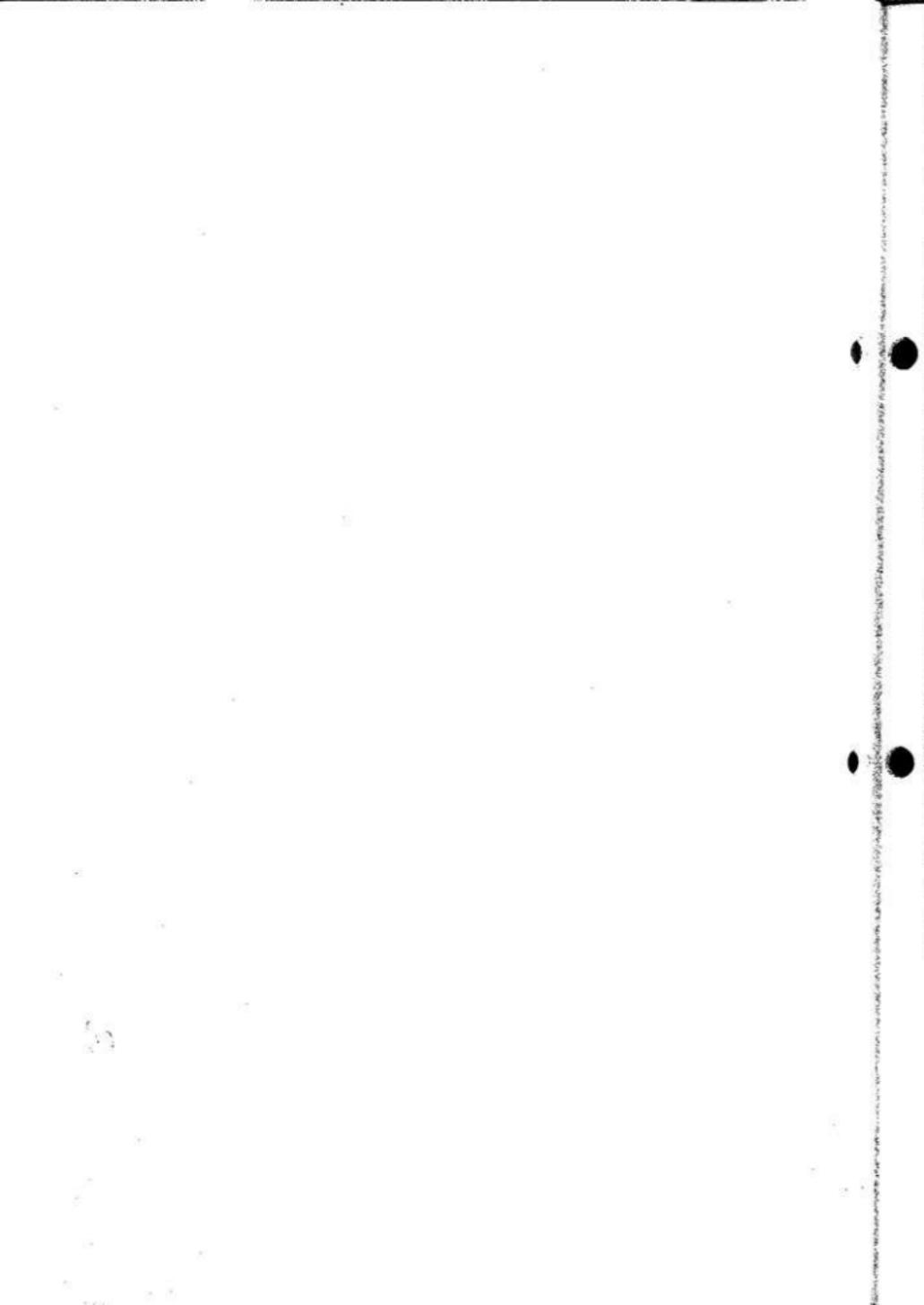
日向の横穴墓は, 五ヶ瀬川流域の高千穂・日之影・延岡, 五十鈴川流域の門川, 小丸川流域の木城・高鍋, 一ツ瀬川流域の新宮・佐土原・西部, 大淀川流域の宮崎・国富・小林に分布する。⁽²⁾五十鈴川の南から小丸川の北の間の地域と広渡川の日南, 福島川の中間には分布しておらず空白地帯である。横穴墓は, 大淀川流域より北に分布を示し, 一ツ瀬川以南に分布する地下式横穴墓と一見, 対照的な分布状況を示すが, 現在のところ横穴墓は須恵器のⅢAの時期の6世紀中頃に出現しており, 5世紀中頃出現の地下式横穴墓とは時期的にかんがりの開きがある。横穴墓のタイプは, 既に指摘されているように, 五ヶ瀬川上流の高千穂・日之影に分布する有尻床・造り出しの石枕のタイプ(所謂「肥後型」)と広義の宮崎平野に分布する無段(玄室と羨道の境の段)・無尻床のタイプがある。県内の調査のほとんどは数基に限られた調査であるが, まとまった調査としては蓮ヶ池横穴墓群⁽³⁾がある。蓮ヶ池横穴墓群は, 丘陵を単位として西からA・B・Cの3グループに分けられ, 須恵器のⅢAからⅥ(6世紀

中頃～8世紀)の間に、グループ間にAグループ(ⅢA)→Cグループ(ⅢB)→Bグループ(ⅣB)という出現時期の移動がみられる。最終木段階はCグループ(Ⅵ)→Aグループ(Ⅶ)→Bグループ(Ⅷ)である。また横穴墓の使用時期としてはⅢA-3基、ⅢB-10基、ⅣA-9基、ⅣB-20基、Ⅴ-5基、Ⅵ-4基、Ⅶ-4基、Ⅷ-1基と、ⅣBの6世紀末に最盛期を迎えている⁽⁴⁾。日向の横穴墓も蓮ヶ池横穴墓群と同様に須恵器のⅢAの6世紀中頃に出現し、ⅣBの6世紀末に最盛期を迎える。構造的には、竹並横穴墓群⁽⁵⁾で7世紀以降にみられる一室複数横穴墓は日向では確認されておらず、また屍床に石枕を造り出すタイプは高千穂・日之影地方に限定され、他地域には及んでいない。当横穴墓の構造は、広義の宮崎平野に分布する普遍的なタイプであり、土器田横穴墓群のグルーピングの問題、土器田東1号横穴墓の装飾画の⁽⁶⁾。地域と集落との関係等の課題は、今後追究していきたいと思う。

(長津宗重)

(註)

- (1) 小田富士雄他「八女古窯跡群調査報告」Ⅰ～Ⅴ 1969～1972年
小田富士雄「九州の須恵器序説」(『九州考古学』第22号)1964年
- (2) 曾我部長良「日向の横穴」1975年
- (3) 宮崎県教育委員会「蓮ヶ池横穴群調査報告書」1971年
- (4) 宮崎県総合博物館蔵の蓮ヶ池横穴墓出土の須恵器を実見して得られた結果であり、詳細については機会を改めて論じたいと思う。
- (5) 竹並遺跡調査会「竹並遺跡」1980年
- (6) 今狩・河内・一本木・吾平原・北平・南平55-1～2号がある。時期的には須恵器のⅢBの6世紀後半である。



＝**凶**

版＝

図版 1



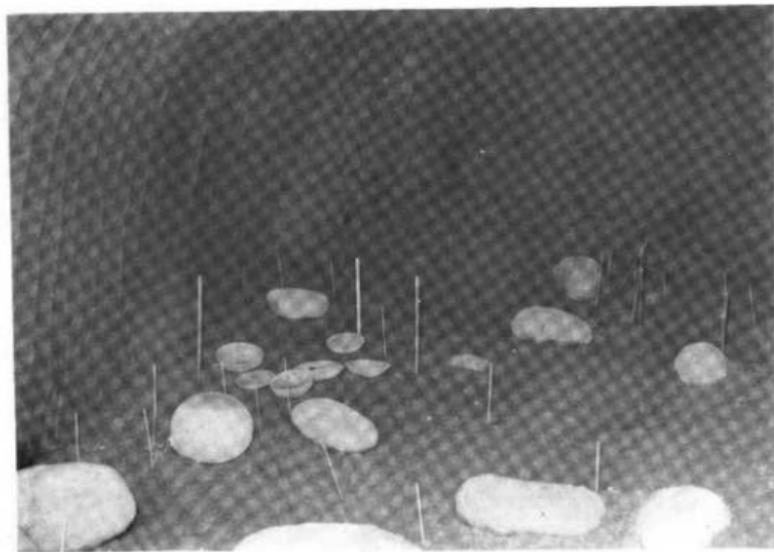
遠景 (南側)



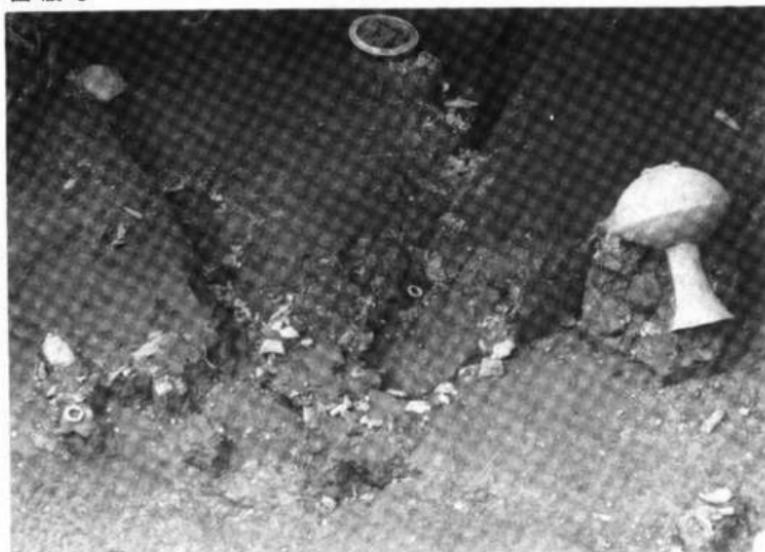
遠景 (東側)



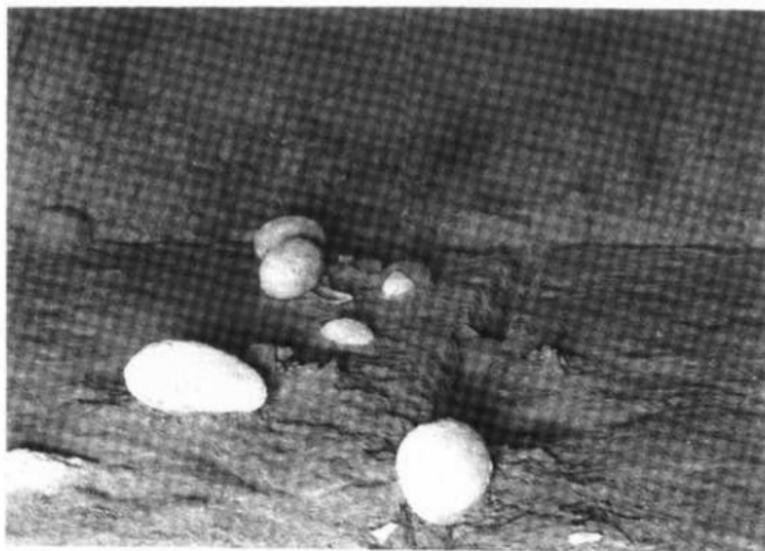
土器田西4号横穴墓（玄室内右）



土器田西4号横穴墓（玄室内左）



土器田西 4 号横穴墓 (羨道部)



土器田西 4 号横穴墓 (奥壁)

図版 4



土器田西5号模穴墓

図版 5



1



3



4



2



5



6



玉 1 ~ 21



22



23



24



25

土器田西 4 号横穴墓出土遺物 (1)



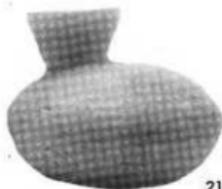
土器田西4号横穴墓出土遺物(2)



17



18



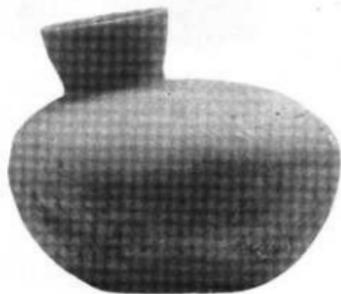
21



19



22

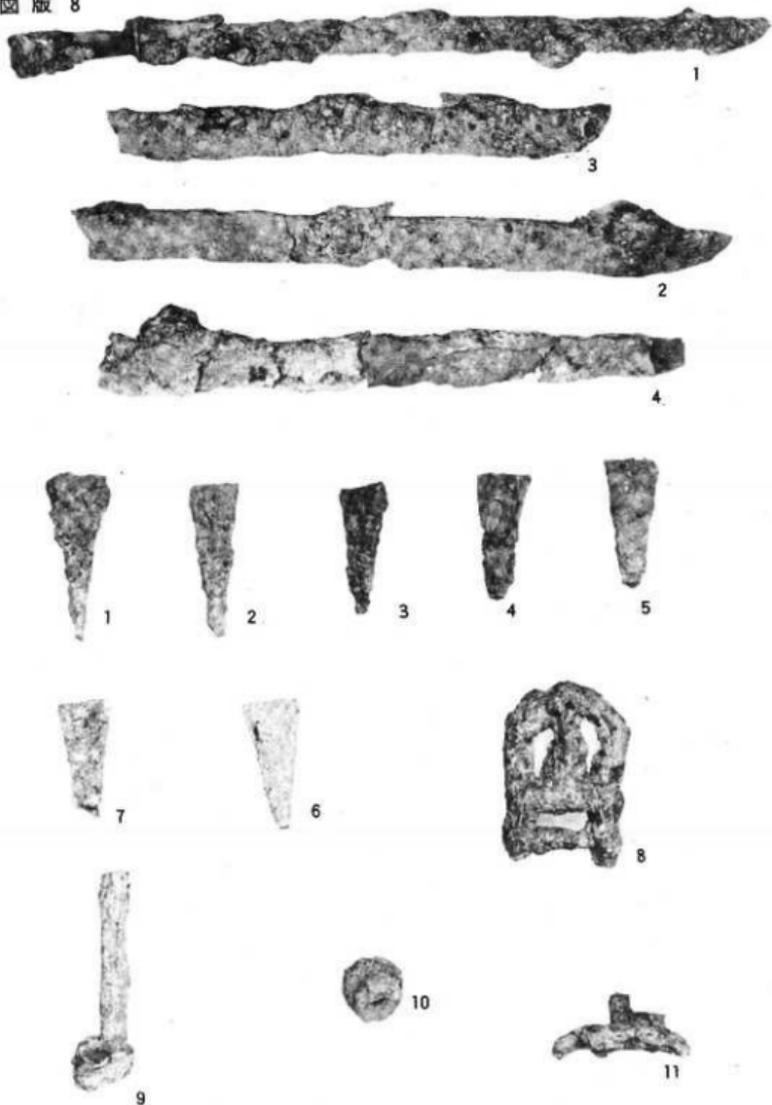


20



23

土器田西 4 号横穴墓出土遺物 (3) (17~22) 西 5 号横穴墓出土遺物 (23)



土器田西 4 号横穴墓出土遺物 (4)

土器田西横穴墓群
佐土原町文化財報告書第2集

昭和58年3月31日

発行 佐土原町教育委員会
印刷 池田印刷